

【論文】

蝶番としての海外修学旅行：20世紀前期帝国日本と高等商業学校研究の展望

阿部安成（滋賀大学経済学部）

1. はじめに

2012年11月1日から16日まで開かれた「旅する高商生たち—明治・大正期の修学旅行報告書」と題された一橋大学附属図書館主催の企画展示は、高等商業学校の歴史資料をだれもが展覧できる稀有な機会となった。ふりかえると、これまでに高等商業学校史料の展示は、たとえば、2002年に小樽商科大学に設けられた小樽商科大学史料展示室においてや、2003年に滋賀大学経済学部附属史料館で開催された企画展示「80年の歩み—彦根高等商業学校から滋賀大学経済学部」くらいしかなかったのではないだろうか。滋賀大学経済学部での企画展示は創立80周年記念事業の一環としておこなわれ、小樽商科大学の展示室は創立100周年記念事業において1つの中核の位置を占めるようになった。滋賀大学と小樽商科大学の事例にあらわれているとおり、いくつかの国立大学（法人）経済学部などでは、その起源に大日本帝国憲法下に機能した高等商業学校があるととらえられている。べつにいえば、20世紀前期の高等商業学校に自校のアイデンティティをおいているとなる。滋賀大学経済学部創立80周年も小樽商科大学創立100周年も、学部や大学が設置されたときから数えた年数を祝ったのではなく、どちらもその母体となった高等商業学校の始まりからの年月の想起があらわされていたのだった。

たとえば、滋賀大学経済学部ではそのホームページで紹介する「学部理念」を、「「士魂商才」の精神を受け継ぎ、広い教養と国際的視野を持つ経済人に」とうたったうえで、それを「経済学部の前身、彦根高等商業学校は、建学の精神として「士魂商才」を掲げ、深い教養と相互扶助・社会奉仕の精神を持つ商業人の育成を目標としました。この理念は、彦根藩出身の井伊直弼大老の武家の教養と、広く社会一般の利益を追求した近江商人の精神とにあやかる理念を体現したものです」と説いている¹。ここにみられるとおり、高等商業学校を母体とする国立大学法人経済学部（以下、高商系経済学部、とする）のいくつかにおいては、その理念や精神において、いまでも高等商業学校が生きているのである²。

本稿は、高等商業学校をたんなる現時からの回顧の対象にとどめず、他方で現在どのように高等商業学校を考えればよいのかを、それを知る手立てとしての史料のありようと

もに考えてゆくその端緒におくこととする。そのときのいわば考察のフィールドを、高等商業学校が実施した海外修学旅行としてみよう。

2. 高等商業学校をめぐる書史論

歴史研究者は歴史資料（史料）がなくては1行の歴史も書くことができない、といわれることがある。わたしはこの言を、歴史研究者に課せられた制約とは考えない。史料というものは、過去におこったことやあったことをいまのわたしたちに報せる伝言板のようなものではなく、むしろ、過去を知るときのわたしたちの手持ちの道具や思考法がどういったものなのかをあらためて意識し点検させるための注意書きだとみなすのである。いくら抽象度の高い表現を用いると、史料という過去を知るための痕跡であり、また手がかりとなる記録を、いまの時点をとおしてもういちど歴史のなかに置き直してみるなのである。

このように史料にむきあう構えをあらわすとき、「書史」という語がもっとも適切だとおもう³。これはわたしの造語ではない。書にも歴史があり、書とその歴史との双方を指す言葉としてこの語がある。書は文書であり書物や図書であり、どういう形態をとろうとも、それらの記録にはそれぞれものの歴史がある。書を扱うにあたって、そこに記された文字や絵画や図像を的確に読むためにも、書を1つのマテリアルにとらえ、それがどこにあったのか、どういういきさつでそこに残されたのか、また、それがいつどのようにしてみつかったのかを掴みつつ、それらを1つひとつ記録することがわたしの仕事となった。これはまずは、目録をつくることとなる。

これまでに高等商業学校にかかわる文献の目録がつけられたことがあった。ただしそれらのほとんどがきまって、高等商業学校が収集した図書の目録だった⁴。たとえば、滋賀大学経済学部を例にあげると、1982年から1992年にかけて発行した5冊の目録に掲載された書誌情報はいずれも、その母体となった彦根高等商業学校が収集した図書などについてだった⁵。その一方で、かつて高等商業学校で作成されたり発行されたりした文書や刊行物は、あまり大切に扱われてこなかったといつてよいのである。彦根高等商業学校刊行物目録稿は、2004年になってようやくまとまったそれが公開されたのだった⁶。母体となった高等商業学校の文書や刊行物の目録があまりつくられていないというこうした傾向は、おおよそほかの高等商業学校の史料にもあてはまる。

目録をつくるためには、当然のこと、そこに収載する書誌情報をつかむために史料1点ずつを手にとることとなる。その中身を完全に把握しないまでも、かならずすべての史料

を手にとってページをめくることで、そこになにが記されているかをおおまかに知り、自分の知りたいことがどこに記されているかいないのかの見当をつけ、そして史料の残りぐあいや史料そのものの保存のようすがだんだんとわかるようになってゆく。保存環境が史料の紙質にあっているのか、史料が閲覧や複写が可能な状態なのかを判断する機会にもなる。文書士（アーキヴィスト）、司書（ライブラリアン）、研究者といった職種や職分があるところで、だれが史料や文献の目録をつくるのかといった議論がある。わたしはひとまず、その作業時間があれば、だれでも目録をつくれればよいとおもう。ただしそのうえで、研究者ももっとその作業をおこなうべきだと唱えておこう。

それは、整理された史料をただ使うだけの暴君に研究者をしないためである。たとえば、日本経済史の専門家を自称するものが、なぜ自分が使いやすいように史料整理をしてこなかったのかとか、自分に複写させずにこの史料をどう活用しようというのかとか激昂したようすを、わたしは身をもって知っている。史料整理には手順があり、またその所蔵機関の人事や方針や学内の位置づけによってその次第が決まるところがあり、また、史料の状態やそのコレクションのぐあいによっていわゆるコピー（国立国会図書館のいう「電子式複写」）の可否を決めている。そうした事情をきちんと知ることもなく、またアーカイヴズの動向を知りもせず、ひたすら自分の史料使用の便宜しか考えない低劣な暴君はひとりやふたりではなかった。

それはともかくも、彦根高等商業学校刊行物目録稿をつくるなかであらたにわかったことも多かった。その1つをあげると、さきにみた「彦根高等商業学校は、建学の精神として「士魂商才」を掲げ」という歴史の記し方の見直しである。彦根高等商業学校建学の精神としての「士魂商才」という標語は、滋賀大学経済学部の理念をつくりだすときに同時にかえりみられた⁷。だが、彦根高等商業学校刊行物目録稿をつくるにあたってわたしが手にした史料では、そうした建学の精神を確認できなかった。これこそ「伝統の創造」にはほかならない⁸。目録をつくって史料を整える作業は、こうした過去の出来事の想起にまつわるあれやこれやの夾雑の被膜を1枚ずつ剥いでゆくことにもつながる。各高等商業学校が作成した文献の整理や調査は今後の課題でもある⁹。

一橋大学附属図書館の2012年度企画展示は、その開催にさきだって東京高等商業学校などの生徒が執筆した膨大な量にのぼる報告書や卒業論文をていねいに探査してその目録をつくり、手間をかけてじっくりとそれらの文献がどのくらいあるのかを確かめるといった地道な作業を経て実施された。かつては、閉架とはいえ書庫内で自由にコピーも可能とな

っていたこれらの報告書などは、いまでは一橋大学附属図書館貴重資料室で保管され、「高等商業学校・東京高等商業学校・東京商科大学学生調査報告書（通称 修学旅行等報告書）」として1つのコレクションとなり、検索可能な目録も整備され(かつては図書カードのみ)、同附属図書館ホームページの当該箇所、「解説」「伝来」「整理の経緯」が示され、しかもデジタル化された画像をみることもできる¹⁰。

もとより貴重資料室保管となるまえも、閉架書庫で報告書などがばらばらに配架されていたわけではなかったが、その閲覧利用は報告書などそれぞれになにが記録されているかが重要であって、1つのまとまりとしてのコレクションの扱いはほとんどされなかったといえてよい。いまでは同附属図書館のホームページに「関連情報」として「図書・論文」も示されて、報告書などを高等商業学校史や20世紀初頭の高等教育機関が実施した調査や旅行の歴史において、このコレクションを読むための工夫と手立てが紹介されているのである。目録作成やデジタル画像閲覧にむけてのあらたな整備が、「通称 修学旅行等報告書」という史料を活用する枠組みをも変えたのである。

さきにみた各高等商業学校が収集した文献の目録は、1つの事例としてあげた彦根高等商業学校においてみられたとおり旧植民地関係資料としてまとめられていた。同校が集めた膨大な文献群は独自の分類法によって整理されていた。たとえば、1931年創刊の『彦根高等商業学校調査課月報』に掲載された収集資料の文献目録の分類にある、「内外経済事情」を中心として「産業一般」や「商業」に分類された文献などのなかから、第二次世界大戦での日本敗戦前の植民地に関する資料が抽出されて旧植民地関係資料というまとまりが作りだされたのである。各高等商業学校が収集した文献のなかから旧植民地関係資料が抜き出された1つの理由は、おそらく第二次世界大戦後の歴史学をはじめとした人文社会科学がアジア、アフリカの動向に関心を寄せてゆくなかでそれらの地域にかかわる史料の所在調査をアジア経済研究所などがおこなっていったところにもとめられるだろう。

アジア経済研究所図書資料部が編集した『旧植民地関係機関刊行物総合目録』全5冊（アジア経済研究所）の発行が1973年から1981年にかけてのことだった。この目録をつくるための所蔵調査をうけて、各高等商業学校の収集資料を所蔵する高商系経済学部の資料所蔵機関もそれぞれに所蔵資料のなかの旧植民地関係資料の目録を作成していったと推察する。その後、アジア地域史研究者は現地の図書館や档案館を調査先とするようになり、かつてほどには高等商業学校収集資料を用いなくなっていったようにおもわれる。

時代の世相や国際関係が研究の動向にかかわり、それがまた史料をめぐるようすを変え

てゆく。他方で、史料への関心やその整備のぐあいによって研究が活性化してゆくようすもある。

3. 高等商業学校史記述の現在

各高等商業学校が刊行したり作成したりした文献の目録があまり整備されてこなかった一方で、それぞれの学校を母体とする高商系経済学部のいずれもが大学史を編纂し、その前史などに起源となる高等商業学校を位置づけていた。わたしにとってのみぢかな例をあげると、滋賀大学経済学部がかかわってこれまでに4つの史誌が刊行されている。第1が彦根高等商業学校以来の学部史といってよい内容の『陵水三十五年』（陵水三十五年編纂会代表芳谷有道編、1958年）、第2が彦根高等商業学校から滋賀大学経済学部に関連する同窓会の歴史といってよい『陵水六十年史』（陵水会副理事長小倉栄一郎編、陵水会発行、1984年）、そして経済学部と教育学部の双方の歴史をあわせた大学史（滋賀大学史編集委員会編『滋賀大学史』滋賀大学創立40周年記念事業実行委員会、1989年、滋賀大学史編集委員会編『滋賀大学史—50周年を迎えて』滋賀大学創立50周年記念事業実行委員会、1999年）が第3と第4の史誌となる。

これだけの史誌がつくられながら、その素材や典拠となったはずの史料がきちんと整理されたり残されたりしなかったことが、滋賀大学の歴史編纂をめぐる大きな特徴となった。また第3と第4の大学史は、その記述のスタイルが逐条編年体の通史となっていて、年表の短文をつなぎあわせたかのような文章で構成されている。通史という記述スタイルは多くの高商系経済学部の大学史に共通する。

そうしたなかで、2002年に刊行された『小樽高商の人々』（小樽高商史研究会編、小樽商科大学発行）は異彩を発する高等商業学校研究の一書となった¹¹。同書は、ひとまず専攻を分けると歴史学と文学の教員によって、小樽高等商業学校の教官と生徒を対象とし、それにみあう主題を設定して小樽におかれた高等商業学校の歴史が記されたのだった。高等商業学校生徒の在学時のようすと卒業後の活躍を伝える記事の集成として『長崎高商物語』（読売新聞長崎支局編集、発行、1985年）もあったが、おもに聞き取り取材にもとづいて執筆された同書にくらべると、『小樽高商の人々』はきちんと史料をふまえた記述となっている。これは、小樽高等商業学校刊行物が小樽商科大学附属図書館によって整備されていることの成果といえる。整えられた史料を活用して、かつて高等商業学校に在籍した人物を研究対象とした主題別の歴史がまとめられたのであった。

『小樽高商の人々』のあとに刊行された高等商業学校の史誌をあげると、『横浜国立大学社会科学系部局八十年史』¹²があるが、これもまた編年体の通史で、そこに横浜高等商業学校はほんの前史としてしか記されていない。20世紀初頭に設置された高等商業学校を母体とする高商系経済学部は、21世紀の初めに創立100年ちかい歴史を経ることとなり、それぞれに祝賀事業をおこなったが、そうした時世に長崎大学経済学部と山口大学経済学部では史誌を編まず、小樽商科大学のみが創立100周年記念史誌を発行した。

小樽商科大学は2001年の創立90周年のときに緑丘のキャンパスから坂をくだって、小樽港にちかい市立小樽文学館を会場として、「小樽高商小樽商大90周年展」を開いていた。さきにみた『小樽高商の人々』の刊行はその記念事業の一環だった。10年後の創立100周年のときを見晴らかしてそのときの事業の準備を着々と整えてきた小樽商科大学では、2011年に『小樽商科大学百年史』を通史編と学科史・資料編の全2冊として、べつに写真集として『北に一星あり—小樽高商・商大の百年』を刊行した（小樽商科大学百年史編纂室編、小樽商科大学出版会発行）。通史編1139ページ、学科史・資料編641ページというじつに大部の大学史である。

この史誌を構成する学科史とは、教育課程の単位認定の変遷史や学部構成の改組史ではなく、教科や科目、あるいは主題別の歴史の謂である。しかもこの学科史の多くが学外の研究者による執筆となっている。こうした構成をとったところにこの大学史の特色があり、学科史の記述をとおして、小樽高等商業学校の歴史をあらわすときの論点を示したとともに、そのための史料のようすにみあった主題が選ばれているともいえよう。ともかくこの大学史は、その母体となった高等商業学校を前史にとどめず、あわせて、それをただ編年体通史としてだけ記述するのではない手立てを示したのだった。高等商業学校を母体とする大学史の新機軸である。

もっともこうした大学史を編めた事情に、小樽商科大学が高等商業学校を母体とするただ1つの単科大学だったことがあるかもしれない。では、ほかの高商系経済学部で、学部史として編年体通史以外の構成がとれるかどうか。部局史といってよい構成の学部史でもあった横浜国立大学経済系学部の史誌も依然として通史だったところをみると、学部史であれ大学史であれ、このさき小樽商科大学が刊行した史誌の編集と構成をほかの学部や大学が選択できるかどうかは、じつにこころもとない。

4. 高等商業学校史研究の論点

いくつもの高商系経済学部が、高等商業学校設置をみずからの創立のときととらえ、それから80年ないし100年の時間を重ねながらも、なかなかその歴史の編み方をさぐりあぐねているようにみえるどころか、史誌を発刊しない学部もあらわれているなかで、松重充浩の論文は高等商業学校史研究のあたらしい展望を開いた¹³。

松重は、山口高等商業学校をおもなフィールドとしながらも、また、高等商業学校とアジアという設定がかつての高等商業学校収集資料目録を作成する観点を想起させるものではあるが、1つに、単独ではなく複数の高等商業学校の動向や展開に目配りをして議論する所作を示したこと、2つに、それとかかわってひろく高等商業学校が収集したり刊行したりした文献を史料としてしっかりと調査し把握するという研究の土台を整えていること、そして3つに、帝国大学とのひとと学知の連繫を見やりながらも、高等商業学校をそれとはべつの高等教育機関として、その固有性をとらえる端緒を示したこと、これら3点において松重の仕事が高等商業学校史研究の劃期となったといえるのである。

このように展望できる高等商業学校史研究に、海外修学旅行という事象をおいてみよう。さきにふれた一橋大学附属図書館が作成した「通称 修学旅行等報告書」のWEBページが示す「図書・論文」には6点の稿があがっている。そのうちの1つが前掲松重論文で、ほかには、長谷川伸三・今野茂代「小樽高等商業学校産業調査報告書目録」(『商学討究』41-4、1991年)、阿部安成「滋賀大学の新しい動き「戦前のアジアへの修学旅行。WEBでみられる所蔵資料展。」(『しがだい：滋賀大学広報誌』23、2006年)、横井香織「旧制高等商業学校学生が見たアジア：台北高等商業学校の調査旅行を中心に」(『社会システム研究』15、2007年)、阿部安成「大陸に興奮する修学旅行：山口高等商業学校がゆく「満韓支」「鮮滿支」」(『中国21』29、2008年)、杉岳志「高商生の調査報告書」(『小樽商科大学史紀要』5、2012年)がみえる(WEBページでの掲載は発行順、表記はWEBページのとおり)¹⁴。

当然のこと、20世紀初頭から第二次世界大戦の日本敗戦までにアジアを観光した旅行者は高等商業学校の生徒だけではなくなかったから、研究の領域をアジア観光へとひろげると、参照すべき論文はもう少し増える。20世紀初頭のアジア観光研究に先鞭をつけた高媛の一連の研究があり¹⁵、高等教育機関のなかでも高等女子師範の大陸修学旅行を考察した長志珠絵の論考や¹⁶、海外修学旅行を実施した学校の関係史料の調査報告も¹⁷、発信されている。

20世紀初頭にくりひろげられたアジア・ツーリズムの活況から100年を経て、2000年代初めからその研究があらわれ、現代のわたしたちの多くが忘れてしまった1世紀前のアジア

ア・ツーリズムの具体相がたどられ、その意味が問われるようになったのである。わたしたちは、海外渡航といえば第二次世界大戦後の高度経済成長期によりやく盛んになったと感じる時代を生きていたところ、忘却の彼方の過去があらためて呼びおこされているといえよう。

この10年あまりのアジア・ツーリズム研究、あるいは、海外修学旅行やアジア調査を視野にいた高等商業学校史研究は、なにを明らかにしてきたのだろうか。その一端だけをここに提示すると、第1に戦争と観光という論点の提示がある。アジア・ツーリズムであれ「学校ツーリズム」であれそこでは、戦跡が1つの重要な観光地となっていた。また、満洲事変から日中戦争への展開において、ただちにアジア各地への渡航が停止となったわけではない。戦跡をめぐり、そして戦時を感じることで帝国日本にむきあうようすがツーリズムをとおして議論されている。

第2に「大陸」の顕現とでもいうべき事態をあげよう。いくつかの高等商業学校で1930年代末から1940年代初にかけて、特別の学科課程が設けられた。彦根高等商業学校ではまず支那科と名づけられたその課程が東亜科となる。小樽高等商業学校ではあらたに大陸科が設置された。奈良女子高等師範学校では海外への修学旅行が、「大陸旅行」「大陸修学旅行」と呼ばれた¹⁸。日本では感受することのできない大陸気分を得た観光者たちは、ひるがえって「日本」を感じてゆく。このようすについては、のちにまたみるとしよう。

母体となった高等商業学校を前史として記す大学史においても、かつての海外修学旅行がとりあげられることはほとんどなかったし、主題別の高等商業学校史研究の魁となった『小樽高商の人々』ですらそれはほんの数行でかたづけられてしまう行事にすぎなかった。それがいまや、高等商業学校史研究を構成する1つの領域となりつつある。

5. 海外修学旅行の諸相へ

高等商業学校が実施した海外修学旅行の具体相をみよう。ここでは、山口高等商業学校（1905年第1回入学式挙行）、小樽高等商業学校（1911年同前）、彦根高等商業学校（1923年同前）、高岡高等商業学校（1925年同前）のようすをとりあげる。これら4校のすべてにおいて、第1回の入学生が3年生になったときに海外修学旅行をおこなっていた（順に、1907年、1913年、1925年、1927年実施）。多くの高等商業学校で修学旅行の担当部局が学務課などとなっているものの、その詳細な規程や要領が当該校の『学校一覧』に載っていないところもある。

そうしたなかで、山口高等商業学校は1908年に「細則」の第12章に「修学旅行」の規則を定めた（以下、当該年度の同校『学校一覧』による）。修学のための旅行を毎年1回春季に実施すること、旅行の欠席は罹病など重大な事由にかぎられること、旅行先を学年別として、第1学年は中国または九州、第2学年が阪神または京浜、第3学年を「清韓地方」とすること、課題として「視察報告書又ハ紀行文」を提出すること、その評点を学年末試験点に加算すること、旅費として8月をのぞいて毎月2円ずつ納めること、となった。のちの改定により、第3学年の旅行先が「朝鮮又ハ支那」（1912年度）、「支那朝鮮又ハ東京地方」（1917年度）となり、第3学年のみに修学旅行が課されることとなった1919年度には、渡航先が「支那朝鮮又ハ内地」に変更される。第3学年だけの実施となったそのときの旅費は、第2学年までに総額22円を三分割して積み立てることとなった。

高等商業学校では海外修学旅行の目的をどこにおいていたか。山口高等商業学校では、「満支朝鮮方面へ修学旅行団を派遣せしは、満韓経営を教育方針の一とせる本校の使命に副はんが為であつたこと言ふ迄も無い」と、のちに校史にまとめられることとなる¹⁹。同校では「本校設立当時ノ教育綱領」として、「一、少壯者ヲ出スコト／二、徳育ニ重キヲ置クコト／三、實際的ノ人物ヲ養成スルコト／四、満韓経営」の4点が「明治三十八年五月」に掲げられたとの記載がある記録が残っている²⁰。校是にいう「満韓経営」の使命を果す1つの機会として「満支朝鮮方面」への修学旅行があったというのだが、ここではあくまでそれを担う人材育成のために海外修学旅行を事前研修として活用しようということなのだろう。

ほかの高等商業学校でも、こうした卒業後の進路を明確にするために海外修学旅行を実施していた例がある。たとえば、小樽高等商業学校が実施した第1回海外修学旅行の一行に校長渡辺龍聖が寄せた送辞が、修学旅行は「卒業期の近い一行に取つて「嫁入の見合に行く様なもの」に喩えられる「すべきゆれいしよん投機」だとの内容だったと報せる記事が地元紙『小樽新聞』（1913年9月12日）の紙面にみえる。彦根高等商業学校でもまた、「正課に準じて課するものにして、卒業後活躍の地域の一としての満洲国の経済事情を实地踏査せしめ、東亜共栄圏の一環たる本地域の重要性を認識、体得せしむるを以て目的とす」る「研究旅行」を海外において実施すると説かれていた。高岡高等商業学校でも、「商業状態を視察に行く」ための海外修学旅行だと生徒が記した例もある²¹。

では、高等商業学校の海外修学旅行はどういった行程や規模だったのか。山口高等商業学校第1回海外修学旅行は、1907年5月23日からの31日間にわたって、教官2名と生徒

28名が、釜山、大邱、京城、仁川、大連、旅順、營口、奉天、安東県、平壤、仁川、群山、木浦、釜山をめぐる旅程となった。山口高等商業学校では、1911年実施の第5回海外修学旅行までおおよそこれと同じ行程の旅行となる。その翌1912年には、「初めて支那本土へ向ひ」と記録された、上海、杭州、蘇州、南京、漢口、武昌、上海へゆく5月11日から33日間の教官4名と生徒80名の大旅行団が組まれた。

小樽高等商業学校第1回海外修学旅行は、1913年7月11日から8月7日までの外地と内地を組み合わせた旅程を教官2名と生徒24名がともにまわった。地元紙の『小樽新聞』はこの大規模な行事を全45回の長期連載として報じた。記事の見出しは「環行三千哩」。小樽高等商業学校ではこのとき、まず進路を小樽港からほぼ真西にとって、最初の渡航地をウラジオストクとし、ついで「北鮮」の清津などに寄ったのちに、九州から本州をめぐり、長崎、山口、神戸、東京の各高等商業学校を訪ねる旅行となった。

彦根高等商業学校での海外修学旅行は、華南、台湾、南洋（フィリピン）をめぐる旅程が初期には生まれ、のちに朝鮮半島、満洲、北平あたりの行程が定番となってゆく。1930年代には修学旅行以外の派遣もふくめると、ほぼ毎年だれかしらの生徒が東アジアの各地へ渡航していた。最長で1か月あまりの期間、引率教官が1名か2名で、生徒は多いときでも13名、少ないときは0と、教官だけでゆく修学旅行もあった。彦根からの海外修学旅行には220円かかったときもあり、その費用は在学3年間の授業料総額150円よりも高かったこととなる。長期にわたる高額のコストがかかる海外修学旅行は、高等商業学校生徒にとって稀有な体験だった。

神戸や門司に出やすい位置にある高等商業学校のばあい、海外修学旅行の旅程の1つの型は、それら2港のどちらかから汽船で釜山、または大連へゆき、ついで列車で朝鮮半島を縦断して北へと進んだり、いわゆる満鉄（南満洲鉄道）に乗ったりして満洲に入り、奉天、長春（新京）、哈爾濱へと到るコースがあり、もう1つの型に、大連、旅順などを経て山海関を越えて北京（北平）へとまわるコースがあった。また、台湾と朝鮮半島とをめぐる組み合わせや、台湾から華南を経てフィリピンまでへとゆく旅程もあった。

こうした旅程はだれが組んだのか。1912年設立のジャパン・ツーリスト・ビューローは、開業後ただちに東アジアに営業を展開した。ときに、同社などによるアジア・ツーリズムと高等商業学校の海外修学旅行は連動していたのである。

こうしてみると、現在の韓国、台湾、中国、フィリピンへの海外旅行は、100年まえの高等商業学校が修学旅行としてめぐった旅程をなぞっているようにもみえる。だがさきにみ

たとおり、小樽高等商業学校では進路を真西にとってウラジオストクへゆく修学旅行をくりかえしたし、実現したかどうかは不明ながらも、彦根高等商業学校の1941年修学旅行では、彦根から敦賀へゆき、ついで日本海を北上して朝鮮の羅津へ渡り、そこから満洲を南下して大連を経て戻るという行程が予定されていた。高岡高等商業学校でも、1935年に実施された教官2名と生徒3名の旅行では、伏木から日本海を北上して朝鮮の雄基へ、そして清津、会寧、図們、新京などをおよそ40日をかけてめぐった。同校の翌1936年の修学旅行では、当初は高岡から伏木へ行ってそこで船に乗り、敦賀、境、萩を経て釜山にむかう旅程が予定されていた。しかし天候のためにそれは実現せずに、実際には「平凡の下関経由」となってしまったものの、しかし、関釜、京城、平壤から金剛山（ただし「外金剛」のみ）、清津、羅津という朝鮮半島の東側を北上するめずらしい行程から、吉林、新京、哈爾濱、奉天、撫順、鞍山、大連、旅順と、後半は型どおりの旅程をとる修学旅行となった。このとき一行は下関で「満鮮ラツシユ」というほどの混みぐあいに遭遇してしまい、予定の乗船がかなわず、下関に一泊せざるを得なくなった。「満鮮ラツシユ」というほどの賑わいと活況は、いまとは異なる日本海航路によっても支えられていたのだった。

6. 「大陸」の顕現

高等商業学校の生徒たちは渡航先でなにをみたのか、また、なにを感じたのだろうか。ここではそれを「大陸」をめぐるようすととらえてみよう²²。

高岡高等商業学校の生徒は、満洲は奉天の百貨店吉順糸房5階のバルコニーや建物の「頂上」にのぼって、「一望千里眼」を得た、また、「市街を一望の裡に眺め、奉天のアウトラインを掴んだ」と記した²³。この「一望」を可能とする目は、他方で、建物の5階にまでのぼらなくとも得られることがあり、奉天へ向かう列車のなかでも「一望無辺の平原」を見渡したと記せるのだった。かぎりないといふ形容してしまう満洲の平原やその彼方にのびる地平線を目のあたりにすると、地上にいても「顧望千里」「雄大無比」といった言葉を用いて、「何とも云へぬ大きな眺め」があらわされるのだ。これほどの眺めは高岡はもとより、内地ではなかなか得られないだろう。この稀有な体験が、生徒たちの心性を2つの方向へとひろげる。

1つは、「午前八時^{〔ママ〕}哈爾濱を出た此の列車は車窓からの目欲しい風景とて一つもない様な涯のない曠野を驀進する。安達、昂々溪間は水草のある湖水さへ所々あるも、駅附近を除く外は全く荒寥無限の荒地である。それはものすごい位広いと云ふよりも、現実から遠

く離れた神秘的な色に満ちた静な風景である」と表現される、現実とは異なるフィクショナルな幻想の心象風景へと。そしてもう1つが、「一望千里〔中略〕満蒙の大平原」に埋蔵する富を想像しながらも、「日本は此の満蒙のために日支両国のために満蒙を守護し、開拓し、人類の福祉に寄与し、貢献する責務を負ふてゐるのである。之等の大きな使命」という、現実のようすを大きく拡大させ超越した規範意識へとひろがるのだった。

さきにみた奉天の百貨店上階からの眺めへの感慨をふりかえると、そこでは、「奉天のアウトラインを掴んだ」と的確に記されていた。現実に見える光景はこのとおりにかならずアウトライン=輪郭で縁取られているはずなのである。しかし、大陸の広大さに興奮する高等商業学校生徒たちはそれを、「無辺」の「涯のない曠野」とつい喩えてしまうのだった。このレトリックが、重厚な責務や深甚な使命を自分たちが、あるいは日本が担えてしまうような気分につながってゆくこととなる。

大陸で感じとられた「一望」という視界をおってみよう。2日間の航海ののちに長江沿岸の「中清地方」へ上陸しようとするとき、「支那大陸を初めて見て、雀躍するを禁じ得なかつた」と記した山口高等商業学校の生徒がいた²⁴。「長江遡江」の船中からも、「森々漠々たる長江に、始めて大陸気分を味ふた。見渡す限り果てしなき平原、紫にかすむ蜒々たる山丘、〔中略〕その大陸的茫漠土は、我々日本人には実以て、立派な心の良薬である」との大陸気分にかかわる日本人意識が高等商業学校生徒の心象に登場した²⁵。あるいは、上海上陸まえに、「やがて雲烟模糊の裏に青一髪の陸地が見えて来た。おゝあれが亜細亜大陸か」と興奮するのも同様である²⁶。大陸をつかんでしまう高商生の眼力は、「支那だ支那だ大陸だ、赤露のモスコーとも仏蘭西の巴里とも続いて居る大陸だと心に叫」ばすほどにもなる²⁷。見えるはずのないモスクワやパリをも、視野のうちに想像したのだった。

他方で、大陸をみてしまった目が、どうしても「日本は矢張小さいと思」わしめてしまうばあいもある。奉天から朝鮮半島を南下して帰校した生徒はそう記さざるをえなかつた²⁸。日本の小ささを知るものは、自分たち日本人の卑小さにも自覚がおよんでしまい、だからこそ大陸を目のまえにしたと実感しうるとき、「此の雄大なる風光に接して誰れかは勃々たる雄心を起さざるものあるべき、余が島国的胆ッ玉は急に膨張して、我が活動舞台の大なるを狂喜」することともなるのである²⁹。

彦根高等商業学校の生徒もまた、「兎に角これでアジヤ大陸の一角に我々の足跡を印したのだ。その地続きは歐洲大陸であると思へば一層異国の旅にあると云ふ意識を深くした。そして憧憬の香港へとむきあふのである」(1926年、仙頭への上陸にさいして)、「歐洲大陸

に続いてある朝鮮に着くとはうその様な話しだ」(1927年、朝鮮にて)と、渡航先での1地点への上陸において、「アジア大陸」への一步を感じ、そこから遙か彼方にあるはずの「欧州大陸」をもみずからの視界に思い描いてしまうのである。

こうした高等商業学校生徒の大陸気分を、「大陸」への興奮と表現してみよう。この興奮はさきにみたとおり、小さな日本というコンプレクスにもつながるが、それを反転させるとともに大陸気分にあわせて膨張させれば、「我が活動舞台の大なるを狂喜」することもできる。ただしここには葛藤がある。いわば日本コンプレクスという心象をうまく反転させられるかどうか——それをひとりの高商生は、「国民と国土の風景」という言葉を用いてうまくいいあらわした。その文面はつぎのとおり。

殊に三日間の船中生活から、祖国(少らくではあるが海外に行つてみたものの云ひたい様な言葉を用ひて)の風景を海の上から、乃ちその外側から眺めるにつけて、その内側に潜んでゐる、日本現代の生活と日本人の性情とが、いかに甚だしく日本的美しい風景をその趣を異にしてゐるか、新らしい日本人が経営する、新らしい都会の生活には、日本の江湾と山岳とによつて印象されるやうな、可憐、美麗、真美なる何物が見出されるであらうか／私は美しい山や川の自然が与へて呉れる恩恵に、もつと気持の強い身体の大い国民の風景が欲しい、調和した自然と人が欲しい／乱雑な都会市民と市吏と警察吏とが、豹変^{〔判読不能〕}□い新聞記事から脱して、美しい環境に恵まれる、美しい人になりたいから、国民と国土の風景とが、何等の関係もなく、余りに別々であることを不審に思ふから、一九二七 八、八³⁰

——海外との対比で日本をみると、そこには一方に太古より未来永劫に不変の美としてつづく自然があり、もう一方にその美にふさわしくあるべき時代の様相としての国民と国土がある、広大無辺な大陸と照らしたとき、その国民と国土は強く大きくなくてはならないとの議論は、十代にして海外を体験した高等商業学校生徒の精一杯の煩悶をあらわしているようにわたしには見える。帝国を担う一員としての高等商業学校生徒の心象と心性のあらわれである。

7. 海外修学旅行と高等商業学校史料

高等商業学校が実施した海外旅行は、実質がどうだったかはともかくも、「修学」の名の

もとに生徒たちが海を越える機会だったから、渡航者たちはその記録を報告書や卒業論文として執筆し、それらが高等商業学校史料として残ったばかりがある。さきにみた、一橋大学附属図書館が所蔵する「修学旅行等報告書」がそれであり、長崎高等商業学校生徒の卒業論文にも、実地踏査をしたうえで執筆された稿がいくつかある。1冊にまとめられた報告書や卒業論文以外となると、それぞれの高等商業学校で教官と生徒が運営した学友会などの団体が発行した逐次刊行物をみることとなる³¹。あるいは、いわゆる卒業アルバムも、写真をとおして高等商業学校の海外修学旅行を知るための1つのテキストとなる。ただし、高等商業学校の卒業アルバムの書誌情報や画像を発信している例はほとんどない³²。卒業アルバムは高等商業学校のさまざまな情報が掲載された重要な記録なのだが、それが活用された事例もほとんどなく、その保存も充分とはいえない。彦根高等商業学校のまとまったそれは彦根キャンパスでは、彦根高等商業学校から滋賀大学経済学部につづく同窓会の陵水会にしかなかった³³。

高等商業学校生徒が執筆した稿には、報告書や卒業論文のほかに、それぞれの学校でおこなわれていた懸賞論文への応募原稿がある。その1例を長崎高等商業学校にみると、「満洲賞金懸賞論文第一号」の栄誉をうけた同校第3学年の田中行雄による『大正十一年十一月 満蒙砂糖事情』、同第2号の『満蒙羊毛取引市場』(1924年)は第1学年野瀬秀太郎の稿、第2学年柳原一麿の同第3号『満蒙貿易ノ発展ヲ論シ日滿貿易ノ改善策ニ及フ』(年不詳)、第3学年吉本泉の同第4号『現時満洲に於ける中華民国側の金融機関並に通貨に関する若干考察』(1928年)、第3学年久保田重徳の同第5号『満洲油房業不振の現状並に更生策』(1929年)、海外貿易科松尾安之の同第6号『大連港の経済的地位及び其将来を論ず』(1930年)、第3学年森寅一の同第7号『満蒙移民論 吾等は何を求めべきや』(1930年)がある(すべて手書き)。これらを所蔵する長崎大学経済学部東南アジア研究所には、長崎高等商業学校3年生が執筆した1908年実施夏季海外旅行報告書(手書き)や、同校教授伏見義夫による『南洋諸島視察旅行報告 最近の爪哇事情』(年不詳、活版印刷)もある。

またほかには、学校内で組織された研究会などによる逐次刊行物があり、かならずしも海外修学旅行の報告や記録ではないにしても、高等商業学校における外地の認識を知る手がかりとなるテキストとなっている。そうした書誌を2例あげると、長崎大学経済学部東南アジア研究所には、『満蒙研究』第4号(長崎高等商業学校満蒙研究会、1934年9月。謄写版刷り)があり、この『満蒙研究』の臨時増刊号として発行された『満洲国視察旅行報告書』(編輯者福田寅夫、発行所長崎高商満蒙研究会、1933年2月。活版刷り)もある。山

口大学経済学部東亜経済研究所には、『満洲研究』創刊号（山口高等商業学校満洲事情研究会、1933年12月）、『満支研究』第6号改称記念号（山口高等商業学校満支事情研究会、1938年12月）、同前第7号（同前、1939年7月）、同前第9号（同前、1940年6月）がある（いずれも活版印刷）。

ここにあげた逐次刊行物も、手書き、謄写版、活版による記録や報告書のどれも、これまで目録に掲載されたことがない（山口大学経済学部東亜経済研究では図書カードがあった）。大学史が刊行されたとはいえその編集において、学部の母体となった高等商業学校の位置が前史にすぎないのであれば、そこで作成されたり発行されたりした文書や刊行物の目録をつくるまで作業がおよばなかったのだろう。

校内で組織された研究会の機関誌の発行情況がどうだったのか、懸賞論文の募集はどの時期におこなわれたのかといった情報も充分にあるわけでもなく、逐次刊行物には欠号もある。そうした不備があるなかで、こうした書史や、さきにあげた卒業アルバムの書史をも海外修学旅行という学校行事と結びつけて理解することによって、20世紀前期の高等商業学校が同時代のアジアとどのようなかかわりをもっていたのかの歴史がいくらか明瞭になるだろうし、あわせて、わたしたちが史料と呼ぶ記録の書史をふまえながら、その歴史を知ったり考えたりする現状とわたしたちの歴史意識とを問うことにもつながることだろう。

8. アジアニゼーションの議論への展望——おわりにかえて

わたしが煩悶と呼んだ、海外修学旅行を体験した高等商業学校生徒の心象風景を、もっともうまく整えた図像が、吉田初三郎の鳥瞰図だとわたしは考える。初三郎式鳥瞰図も、20世紀前半のツーリズムと並走する時代の小さな、しかし数多く流通した象徴としてあった。アウトライン=輪郭に縁取られた風景は、対象を一望する目によってとらえられ、しかも、対象をみつめるその広角の目は、遙か遠くを見晴らすとともに、アウトラインのなかにかぎりの風景をおさめるために、島も半島も列島も大陸も大きく湾曲させてしまう。これが初三郎式鳥瞰図の技法である。「一望」を英語におきかえると、bird's-eye viewとなる。まさに鳥瞰である。初三郎式鳥瞰図は、1つの位置にある目から、遙か遠くを見渡し、かつ、対象を捻じ曲げてでもみずからの視界におさめてしまうのである。

ここではおおまかな議論にとどめると、この初三郎式鳥瞰図は、20世紀前期の帝国日本をあらわすもっとも彩あざやかな図像であり、それは対象を描くものの身勝手さをもあら

わし（勝手に、実態と異なって、描く対象を捻じ曲げてしまうのだから）、やがては消えてしまう時代の構図なのだとおもう。初三郎は外地だけでなく、もちろん内地も描き、グロテスクなまでに湾曲させた日本列島も描いた。

初三郎が描く鳥瞰図と、海外修学旅行を体験した高等商業学校生徒の心象風景となった、あるべき「国民と国土の風景」がわたしには重なりあってみえる。

わたしが対象にむきあうときのこの感覚を、きちんと歴史のなかにおいてみるのが、歴史研究者としてのわたしが高等商業学校を考えるとときの課題となる。その成果がきちんと出せたとき、かつての高等商業学校という教育装置があらたな姿をあらわすようにおもう。その見通しをここで仮にのべておくと、20世紀前期に主要な性格を備えて登場した高等商業学校とは、その時代に展開した Asianization——グローバル化のアジア版であるアジアニゼーションの動向と動態を支え、その展開を担った1つの装置ではないか、ということとなる。ここにいうアジアニゼーションとは、アジア化というよりも、アジアに細胞のようなネットワークができてゆくようすを想定している。

厳密に言えば、ここにいう Asianization は East Asianization であり、これまでも本稿でかんたんに「アジア」と記したところは「東アジア」とした方がより適切だったかもしれないが、それは今後の課題としよう。また、こうしたアジアニゼーションの1つの装置として高等商業学校をとらえようとする提起に対して、高等商業学校で展開した会計学や法学を無視するのかといった反発が予想されるが、わたしの議論は高等商業学校の1つの相、それはこれまで研究されることのなかった領域でもあるところを示したにすぎない³⁴。

アジアニゼーションにはまた、高等商業学校が担った実学や実業がかかわってくるし、この業や学をめぐる変動は日本だけ、アジアだけの現象や事態にとどまらず、ほぼ同時代のヨーロッパでも展開していた世界史の一面だったといつてよい³⁵。

帝国化してゆく近代国民国家としての日本における実業=実学を担う高等教育機関としての高等商業学校は、世界史というフィールドでの同時代性と、その運営が展開する東アジアという方向性とを帯び、そのときの1つの実践場として高等商業学校の海外修学旅行があった、とわたしは考える。世界史と東アジアと帝国日本の結び目の1つに高等商業学校が位置し、その具体相をあらわす高等商業学校のカリキュラムが海外修学旅行だった。

このカリキュラムを高等商業学校のなかで、とりわけその生徒を軸に考えると、学校内でおこなわれた語学教育をはじめとする教科や教官と生徒が参加する研究会活動にながかり、授業の登録状況や研究会活動への参加のようすを海外修学旅行参加生徒についてと

らえてみることに、そうした生徒が高等商業学校卒業後にどのような職種のどのような企業に就職をしたのか、さらには、その後の転職のようすなどを跡づけてゆくこと、また、海外修学旅行の渡航先に高等商業学校の同窓会組織が支部を設けていたか、それはいつ設置されたのか、支部を組織する卒業生はどのような仕事についていたのか、そうしたさまざまな情報をつなぎあわせるときの1つの場として、高等商業学校の海外修学旅行を位置づけられるだろうとの見通しを本稿では示してみた。

ただし、それぞれの高商系経済学部で、高等商業学校史料の残りぐあいが異なる³⁶。しかもそれが明瞭にわかる目録がつくられていないばあいが多く、ただこの目録がない事態にはどうにも仕方のないところがある。長崎大学経済学部の東南アジア研究所、山口大学経済学部の東亜経済研究所、滋賀大学経済学部の経済経営研究所など、かつての高等商業学校の調査課や研究部などを継いで歴史資料の保存、公開、活用につとめているところもあれば、教育研究支援センターなどと名称と役割が変わってしまったところもある。研究所の名称がついていたとしても、学部の事情によってなにを主とした業務とするかはそれぞれに異なる。目録といった時間のかかる業務に専念できない事情がそれぞれにあるだろう。

ここでは、高等商業学校の多様な機能を結ぶ1つの場として海外修学旅行をおいてみた。それを鎧や蝶番の役割に喩えることができるだろう。高等商業学校というつなぎ目は、世界史のなかの東アジアにおける帝国日本を位置づけるときにも思索を導く手がかりになるとおもふ。

[附記]

本稿は一橋大学附属図書館企画展示「旅する高商生たち—明治・大正期の修学旅行報告書」にかかって2012年11月2日に開催された講演会の原稿に手をいれた稿である。講演会原稿は、阿部安成「高商生の泰安亜行～Bon voyage!—20世紀前期高等商業学校が実施した課外修学旅行の妙趣」滋賀大学経済学部 Working Paper Series, 2012, no. 177. として発表した。本稿と講演会原稿には重複するところがある。いずれも、2012年度経済学部学術後援基金助成「高等商業学校の語学教育と調査実習についての実証研究」と、2012年度科学研究費補助金基盤研究(C)「20世紀前期の帝国日本における実学実践と教養主義をめぐる文化研究」(課題番号24520746)の成果の1つである。

- ¹ “経済学部”. 滋賀大学経済学部. <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=2>, (参照 2013-04-01).
- ² なお本稿で高商系経済学部というとき東京、神戸、名古屋の高等商業学校をひとまず省くこととする。
- ³ わたしの書史論については、阿部安成. 島の書、書の園—国立療養所大島青松園をフィールドとした書史論の試み. 国立ハンセン病資料館研究紀要. 2011, no. 2.を参照。
- ⁴ 多くの高商系経済学部の資料所蔵機関がこうした目録を備えている。たとえば、横浜国立大学経済学部附属貿易文献資料センター所蔵旧制横浜高等商業学校収集資料目録. 横浜国立大学経済学部附属貿易文献資料センター. 2001. があり、同書所収の飯島渉. 旧制横浜高等商業学校収集資料について. は表題にある資料の概要とその利用と各高等商業学校収集資料目録の書誌情報を報せる解説である。
- ⁵ 目録は地域別にまとめられ、刊行順に「満蒙」「朝鮮」「支那」「台湾・南方・樺太」「補遺」となる。
- ⁶ 阿部安成. 滋賀大学経済経営研究所調査資料室報⑧. 彦根論叢. 2004, no. 350.
- ⁷ 経済学部理念ワーキング・グループ. 経済学部の理念とその解説.彦根論叢. 2000, no. 326.
- ⁸ エリック・ホブズボウムほか編. 創られた伝統. 前川啓治ほか訳. 紀伊国屋書店. 1992.
- ⁹ たとえば近年あきらかになった長崎高等商業学校の夜学講習をめぐる史料については、阿部安成. 夜に学ぶ—20世紀前期の長崎高等商業学校における1万2036人への実務者教育. 滋賀大学経済学部 Working Paper Series. 2011, no. 144.、阿部安成. 講義録癩祭—長崎大学経済学部東南アジア研究所所蔵「長崎高等商業学校講義録」等目録. 滋賀大学経済学部 Working Paper Series. 2012, no. 178. を参照。また同校生徒の卒業論文についての目録も近日発表予定。
- ¹⁰ “修学旅行等報告書”. 一橋大学附属図書館.
<http://www.lib.hit-u.ac.jp/retrieval/bunko/fieldtripreports.html>, (参照 2013-04-01).
- ¹¹ 同書の書評を『彦根論叢』に寄稿した(阿部安成. 書評『小樽高商の人々』. 彦根論叢. 2004, no. 350.)。
- ¹² 横浜国立大学社会科学系部局八十年史編纂委員会編. 横浜国立大学社会科学系部局八十年史. 横浜国立大学経済学部・経営学部・国際社会科学研究科. 2008.
- ¹³ 松重充浩. “戦前・戦中期高等商業学校のアジア調査”. 岩波講座帝国日本の「学知」 第6巻. 末廣昭責任編集. 岩波書店. 2006.
- ¹⁴ 高等商業学校の海外修学旅行であれば、小樽商科大学百年史編纂室編. 小樽商科大学百年史 学科史・資料編. 小樽商科大学出版会. 2011. に阿部安成. 小樽高商の海外修学旅行記録. が収載されている。
- ¹⁵ たとえば、高媛. ノスタルジーと観光—戦後における日本人の「満州」刊行. 国際交流. 2000, vol. 23, no. 1.、高媛. 戦勝が生み出した観光—日露戦争翌年における満洲修学旅行. Journal of Global Media Studies. 2010, no. 7. がある。
- ¹⁶ 長志珠絵. “「満洲」ツーリズムと学校・帝国空間—女子高等師範学校の「大陸旅行」記録を中心に”. 『帝国と学校』. 駒込武ほか編. 昭和堂. 2007.、長志珠絵. 「過去」を消費する—日中戦争下の「満支」学校ツーリズム. 思想. 2011, no. 1042.
- ¹⁷ 王莞吟. 20世紀初頭、九州地方に於ける海外修学旅行記録—商業学校を中心に. NEWS LETTER. 2012, no. 24.
- ¹⁸ 関係史料が奈良女子大学附属図書館ホームページの「奈良女子大学校史関係史料」「修学旅行等」から閲覧できる。“修学旅行等”. 奈良女子大学附属図書館.
<http://www.lib.nara-wu.ac.jp/kousi/moku/n10.html>, (参照 2013-04-01).

-
- ¹⁹ 山口高等商業学校沿革史. 山口高等商業学校. 1940.
- ²⁰ 「山口高等商業」の名が入った縦罫紙に墨筆で記されたこの文書は、山口大学経済学部東亜経済研究所所蔵の『山口高等商業学校大学予科一覧 自明治三十八年至明治三十九年』（山口高等商業学校、1905年）に挟まれてあった。なおこの文書が明治38年5月に記録されたのか、のちに明治38年5月のこととして記されたのかよくわからない。
- ²¹ 鈴木真一. 満蒙の夏をたづねて. 学友会雑誌. 1927, no. 3.
- ²² ここでの議論はすでに発表した、阿部安成. 大陸に興奮する修学旅行—山口高等商業学校がゆく「満韓支」「鮮満支」. 中国21. 2008, no. 29. と重なるところがある。
- ²³ 八島美一. 満鮮旅行記. 学友会誌. 1929, no. 5.、幸道武志. 満洲の夏を訪ねて. 志貴野. 1936, no. 16.
- ²⁴ 中清紀行（一）. 学友会報. 1907, no. 34.
- ²⁵ 遊支日記. 学友会報. 1919, no. 61.
- ²⁶ 南支那旅行記. 学友会報. 1914, no. 52.
- ²⁷ 大陸の味象. 学友会報. 1920, no. 63.
- ²⁸ 奉天まで. 学友会報. 1916, no. 55.
- ²⁹ 中清紀行（一）. 学友会報. 1907, no. 34.
- ³⁰ 田中敏博. 満鮮合体観. 彦根. 1927.
- ³¹ 後注17に示した王の稿も参照。
- ³² 彦根高等商業学校の卒業アルバムの書誌情報については、後注6にあげた阿部の稿を参照、デジタル画像は、「デジタルアーカイブ彦根高等商業学校卒業アルバム」. 滋賀大学経済経営研究所. <http://mokuroku.biwako.shiga-u.ac.jp/eml5.asp?mode=albumgazo>, (参照2013-04-01). で閲覧できる（25点収録）。なお検索にあたっては「表紙タイトル」には「LA MEMORIA 1927」など表紙に記された文字を入力しないとヒットしない。だが「内容」に「卒業アルバム」と入力して検索すると全25点がヒットする。小樽高等商業学校の卒業アルバムに掲載された海外修学旅行写真については、後注14の阿部の稿を参照。
- ³³ わたしが調査して所在確認したかぎりであれば、小樽高等商業学校卒業アルバムは小樽商科大学附属図書館、高岡高等商業学校のそれは富山大学経済学部資料室、横浜高等商業学校は横浜国立大学附属図書館、山口高等商業学校は山口大学経済学部東亜経済研究所、長崎高等商業学校は長崎大学附属図書館経済学部分館にある。
- ³⁴ 2012年12月14日と15日に長崎大学経済学部を会場として開催した「旧植民地関係資料ワークショップ／高商 studies」では「戦前期日本の広告研究と大学・高商の広告研究会」という論題の報告もあった（報告者は田島奈都子）。高等商業学校を考えるうえで重要な主題である。
- ³⁵ ドイツ、イギリス、ベルギーなどの動向は、西沢保. 世紀転換期における高等商業教育運動をめぐって—飯田、関、福田の留学を中心に. 経済学雑誌. 1987, vol. 88, no. 1. を参照。
- ³⁶ 本稿執筆中に、平井孝典. 公文書管理と情報アクセス—国立大学法人小樽商科大学の「緑丘アーカイブズ」. 世界思想社. 2013. が刊行された。高等商業学校史料をめぐる最初のまとまったアーカイブズ論である。

【論文】

蝶番としての海外修学旅行：20世紀前期帝国日本と高等商業学校研究の展望

阿部安成（滋賀大学経済学部）

要旨

本稿においてわたしは、20世紀前期の帝国日本における高等教育機関として機能した高等商業学校を研究するときの論点と課題を提示した。高等商業学校ではそのほとんどで東アジアへの海外修学旅行を実施していた。この海外修学旅行は、高等商業学校のさまざまな活動やいくつもの機能を連結する1つの結び目となっていた。海外修学旅行など生徒の動向に注目すること、高等商業学校関係史料の現状に留意すること、実業と実学をめぐる世界史の同時代性と東アジアへの展開と帝国日本の形成を連環させて考察すること、を高等商業学校研究の課題として提示した。

キーワード

高等商業学校、海外修学旅行、帝国日本、高等教育

[Article]

Review of Higher Commercial School Studies

Abe, Yasunari.

Faculty of Economics, Shiga University

Abstract

This paper is a critique of the current state of research into the Higher Commercial School. Higher Commercial School was the institution of higher education in Japan in the year to the 20th century. In the Higher Commercial School, had been carried out overseas excursion. A case study of school trips abroad, research shows the challenges and issues Higher Commercial School

Keywords

Higher Commercial School, overseas school trips, Empire of Japan, higher education